

第三回俳句賞「25」

応募作品一覧

《予備選考方法》

本大会では、四〜七人で一チームとし、二十五句の作品を募集しました。

応募者の学校・名前を伏せた上で、全二十九作品の中から各選者の先生方に一席〜四席の計四作品を予備選考して頂きました。

一席を四点、二席を三点、三席を二点、四席を一点とした合計点を算出します。

また、全体の作品の中から秀逸句十句も選出されます。

1 花の歳時記

風が吹きゆれる菜の花見つめたり
桜咲く何度散つても咲きほこる
朝早く君と場所取り桜見る
たんぽぽを息吹け飛ばす笑う子よ
あざやかに道先に咲く白椿
咲きほこる長崎の地に初桜
技先の水木の花を遠望す
青葉して緑深まる夏来たる
葉桜の一見そぼくな美しさ
紫陽花の色の変わって七変化
日に向かうひまわりと我重ねつつ
一輪の夏の思い出赤いバラ
ひまわりは多くの未来をもっている
どんぐりを拾い集めて我が宝
紅葉舞い夕日差し込む赤い道
朝顔の成長ともに過ぎる夏
金木犀見えずに香る風吹かれ
人々は心奪われる紅葉に
子どもの手もみじと比べ親笑う
満月をススキと団子でかざりつけ
遠出してコスモス見つけ笑う君
枯葉散り踏み音鳴らす小さき子
白を背に色どられてゆく針葉樹
冬木の芽光をおびて目を開く
早梅や開花するのを先駆ける

2 貴方と歩む生涯〜四季を添えて〜

雪道に 咲く寒牡丹寒々し
放課後に凍える私をつつむ君
赤い頬恥ずかし混じりに触れる柚子
上着脱ぎ素肌に触れる春風よ
空に舞う桜とともに散った恋
嵐去り未来を思う春の空
涼風に たなびく緑夏感じ
蛙の音これが二人の赤いベル
夏の海輝く笑顔反射する
扉開け家中広がる栗の匂い
おかえりと言う人のいる秋の夕
団子手に月が綺麗と紅葉顔
肌をさす北風家のあたたかさ
コウノトリ守るべきものまた一人
カイロ手に歩いた公園三人に
わが家からきこえる笑声聖なる音
あたりには色とりどりの命咲く
子の成長寂しげな空に綿毛とぶ
せきがふえ不安がつのるおぼろづき
あと何回歩けるだろう桜道
南風揺られて響く鈴の音
微笑する君はひまわりこれから
五月雨にまぎれて聞こゆ最期の音
雨ともに迎える二人の一人記念
いなさ晴れあなたの分まで強く生きる

3 四季折々の学校生活

一輪の花見て思う春が来る
桜咲き高なる鼓動初めの日
校舎から見える景色はピンク色
桜散る新しい出会い心躍る
五月晴れ木々の葉っぱが緑色
雨降って色とりどりの海月かな
朝顔を見つけほほえむ通学路
芝刈のにおいと音が授業中
汗だくで友とおしゃべり帰り道
人のいない廊下に響く夏音色
堂々と廊下を走るゴキブリが
夏課題終わらずねがう明日休み
水筒とタオルが並ぶ炎天下
廊下から見える紅葉きれいだな
焼いものにおいをかいで帰路いそぐ
自室にて夜鍋キメこむテスト前
北風の奏でる音は別れつく
黒板を消すとともに降る粉雪
パソコンの熱にもすぎる極寒日
帰り道友と始める雪合戦
冬は戦いカイロ争奪戦負けないぞ
カレンダーめくると徐々にせまる別れ
テスト前こたつにこもり大奮闘
新年の貯金通帳一杯だ
窓の外友と眺める雪景色

4 巡る青春

新学期期待と不安入り交じる
真新の教科書開き折り曲げる
授業中ふと外見ると桜舞う
夕桜友の笑顔を華やかに
散る桜友と一緒に眺める日
梅雨明けて傘立て見ればもぬけがら
暑き日に友の姿で頑張れる
窓の外かけ声届き光る汗
校舎前耳を澄ませば夏音色
夏期講習並々ならぬ眠気あり
夏の夜課題みつめてあせる君
はねた髪手ぐしで直す君九月
秋高しパステルカラーを描く昼
校舎窓目に飛び込んだ銀木犀
レモン色君のリュックを追いかけて
アパートの階段で知る栗ご飯
秋風や校旗なびゆき震えてる
ペン回しテストの空欄続く冬
雪を見て微分も解かずに誰想う
ココア待ちマフラーごしに友の声
年賀状届いた合図バイク音
父の愛家族のためにおにはそと
吹雪でもあの子に会うため家を出る
春風が教えてくれる卒業を
桜坂想いを繋ぎ巡り会う

5 田舎のJKライフ

初桜膝下スカートなびかせて
入学式たくさんの花ここに咲く
校庭の桜の元でハイチーヅ
荒梅雨に打たれて染まる制かばん
夏の日に朝目を覚ますと蝉の声
暑い夏襟から覗く赤い跡
今年こそ白肌保って日焼け止め
汗だくの選手支える守護者役
友達と青空の下映え写真
戦いがいよいよ始まる黒光り
コスモスや我に譲れよその身長
おそろしい食欲の秋、夏の
窓の外ふと見てみれば薄紅葉
秋が来ていいわけしてでも食べたくて
インスタにたくさん映える逆さ絵が
白い息マフラーと共にバス停へ
我守る毛糸のパンツいざ出動
冬のバスたかが一分待ちきれず
冬風が私の細胞破壊する
重ね着で着太りするより我慢する
暗い道やきいもの車追いかける
バレンタイン食べ過ぎニキビこんにちは
すりへったローファーはいて卒業式
桜舞う今さら恋しいチャイム音
私色に染めてみせよう霞草

6 日常生活

葉桜を眺めて下がる君の眉
心地よい風と共に春の月
光さす大海原へこいのぼり
聖母月恵みと和みやすらかに
帰り道一つの傘で手がふれる
梅雨明けが涙もかき消しはればれと
浴衣着て友と眺めた夕暮れを
だんだんと響き渡るやセミの声
花火待つ僕の鼓動がはやくなる
陽炎と君に目を奪われゆらゆらと
星よりも瞳に映るは月兔
秋高くピストルと共に走り出す
ハロウィンやお菓子の扉へ向かう子よ
秋空や染まり散りゆく木々たちよ
文化祭気合を入れて門あける
紅葉と涙がひらひら落ちてくる
肩寄せて聖なる夜の隠し事
大人でも子供にかえる雪遊び
手の甲に雪の結晶きらきらと
初スキー怖がり滑る手を取って
春昼のいざなう先は睡の道
ふと見上げ想い寄せるは朧月
春夕焼思いい出たどる通学路
春夢やふるさと思いい潤んだ目
未来へと踏み込む足跡行く春よ

7 遠回り

真夜中の軋む足音熱帯夜
口どけのよいラムネ菓子夏の月
読み切れぬ文庫つめ込む夕月夜
秋風は机の上の地図を過ぐ
秋めくや逆上せた顔のフラミンゴ
狛犬に精霊虫籠より放つ
秋風や古き洋館に消火栓
秋の夜や寺の明かりの点いており
大空へ飛んだのか案山子の帽子
信号の赤濁りたる吹雪かな
襟巻きに頬鼻耳と沈めたり
スーパールの重き袋や冬の星
冬帽の取りて前髪軽くなる
湯ざめしてひえた耳たぶ挟む指
隙間風ピアスの穴も通りゆく
加湿器やアルコール消毒の霧
冬満月バスガイドは「うさぎ」歌う
寒雀絵馬に書けない悩みあり
ひびのあるおもちゃ見つける冬至かな
クリスマス父と揃いの電波時計
引き出しの奥古年のドロップス
冬苺おとぎ話の森に住む
気怠げな海驢の拍手冬終わる
道化師のふとした真顔春寒し
万愚節着ぐるみの目の中に穴

8 我らが日々

水道水細し残暑の体育館
運動場白線上のいぼむしり
記念碑の文字うすうすと秋彼岸
校庭に審判の笛秋澄めり
稲妻や仰げばすでに空暗し
街灯の消えかけている夜寒かな
ブレザーのボタンを留めて暮の秋
十六の我振り返り冬に入る
線香の匂いのつんと冬の夜
塾へ行くファミマのおでん缶ココア
冬の蜂廃品回収車に越され
日向ぼこ心に猫を飼う人と
友二人歩調のそろう小春かな
黒板を大きくつかう冬日和
木枯や校歌の海を見はるかす
放課後の永遠めきて冬茜
木枯に鳩ばつと飛ぶ背の白さ
自転車は立漕ぎでいく冬の夜
区民館にドリブルの音冬の星
「暇なの？」と塾の先生三が日
猫撫でるように初氷に触れる
雪積もる道を選びて歩きけり
ジャンパーの肩いつまでも消えぬ雪
校門を出て見上げた冬満月
寒風に母の歩幅の狭くなり

9 かける

年の瀬に鐘の音向けて急ぎ足
兄弟でそばをかきこむ大晦日
書き初めを僕も書けたよ自慢気に
冬の田を駆け回る犬さくさくと
小春日や小屋かけ回るウサギたち
数かける数学テスト難問だ
制服をかけてたハンガーしまい込む
それぞれの夢に向かって駆け巡る
増えていく君への思い初桜
ツバメの子巢立ちを見守る私たち
春の暮飛べない鳥は地をかける
仲直り笑顔の二人空に虹
手を握る大空駆ける流星に
夏疾風バトンをつなぐ君と僕
駒鳥の美しき声空かける
あの人に思いを懸ける夏の空
下り坂ジリジリ揺れるアスファルト
涙して欠ける心は空蟬に
君と夏夜を駆ける星眺めてた
モノトーン七色に染む雨上がり
筆走る君のキャンパス僕がいる
恋心満ちては欠ける月のよう
最後の矢心落ちつけ飛ばしてく
未来地図描けるだろうか卒業後
林檎食べ欠けた前歯の愛しさよ

10 円空仏

けら鳴いて円空仏の木目かな
晩秋や点滴一滴ずつ長く
オカリナを包む左手冬うらら
風邪ごもり着信履歴をスワイプ
咳の子の背のこはばり朝支度
寒雷や消せども著しチョーク痕
底冷えやシャッター街に紫煙立ち
おでん屋の身の上嘸椅子の錆
地下鉄の闇の深さや冬の暮
悴む手より合図灯の残像
道連れの杖のささくれ冬日和
雲水の冬蜂そつと逃しけり
冬の虹風と爪弾くアルペジオ
連弾の音程狂ふ枇杷の花
迷ひ子に物知り顔の寒鴉
夕靄に立つ土埃ラガーマン
末っ子の手袋の先余りけり
雪を踏むフツ素の詰まる永久歯
小つごもり靴下二足吊さるる
去年今年銀河に微熱放ちをり
お元日グローバル化の来ぬポスト
競り市のうるめ鰯の蒼光る
理科室に眠るビーカー春隣
冴返る独りごつ路かへり路
綱渡るピエロの稽古柳の芽

11 黒髪

黒髪を飾る白梅芳しく
キンセンカ涙乾かす日の高く
うららかや温羅にも負けぬ稚児の声
桃色のレースカーテン風光る
点々と点る街灯帰る雁
蝌蚪の尾のみぢかくなりぬ反抗期
せせらぎや蛍の玉の緒の光り
早苗月夕空映す千枚田
海沿ひの暁透かす夏の蝶
朝もやに淡く色づく白蓮
蠅除や母のぬくもり通りぬけ
水墨画の富士ポンポンダリア咲く
名前なき草に卯の花腐しかな
地響きや夜空彩る揚花火
秋近し座敷わらしの戸を叩き
実柘榴や有象無象の種子の散り
稲つるび歩みを急ぐ老夫婦
秋茜たそがれ時に影二つ
凍風や葉巻の先の火の赤し
寒空に消えゆく湯気や味噌香る
柘の花にあふるる老の笑み
鯛焼を腹から食らふ令和の子
ひとまはり小さくなりゆく雪うさぎ
細き糸切れぬやうにと舞ふ傀儡
花時雨恋人たちの道分かれ

12 高校三年間の思い出

春一番初めの一步の後押しだ
坂のぼり着いた先には入学式
春風や背中押されて足を出す
春風と初めて登るラスボスロード
春風や今日も何かを包み込む
新クラス見回せばまた同じ顔
春の日の重いまぶたと安心感
海に立ち肌で感じる桜風
積乱雲自分は邪魔だとよけて虹
夏休み校舎に響く楽器の音
暗闇にうちあげられた恋火花
猛暑日で汗水流しマーチング
花火のせ君への想い枯れるまで
仮引退身にしむばかり思い出と
文化祭あなたに届けるこの声を
金木犀好みそれぞれ僕は好き
マフラーに顔をうずめて君を待つ
帰り道レンズの奥には君と雪
澄んだ空「冬が好きだ」と君は言う
木も恋も全て枯れ果て日が暮れる
冷たい手ぬくもりくれるのカイロだけ
朧月別れを想いにじむ視界
仲間との別れを告げる梅の花
桜散る「さよなら」よりも「またいつか」
蜃気楼まだ見ぬ世界へ飛び立つぞ

13 こんな恋がしたかった(いとかなし)

春まけて光さす朝君を見た
春の華美しい君の髪のように
朧夜が照らすリナリア咲き誇り
公園で君のお花を抱き寄せる
桜吹き君の姿に目が止まる
梅の花君に似合うと声がして
こころやす乱れてそめし春の風
楽しみと海待つ君はいとをかし
水遊び君の笑顔に胸踊る
夏の夜打ち上げ花火に酔う二人
君の目に何が写るか不知火で
距離離れ君の言葉も送りませぬ
ぬくもりはかりがね寒き日にもなき
赤蜻蛉逃げ出す姿君みたい
帰り花君と重なり息もれる
片恋の行方は吹雪先見えぬ
八日吹君との仲に吹くよう
雪起こし君の姿に眉上がり
初雪が別離の縁起花枯れる
僕の花雪にうもって見失う
春泥の道を歩くも足重き
春出水溢れる想い置いて行き
春の夢消えゆく想い幻に
春時雨去ると出てきたハナミズキ
新しい声が聞こえて山笑ふ

14 尽

積読が減るほどの夜や猫の恋
ウインナーの目の虚無感や春日和
低声の彼から電話春の宵
今朝の夏端の欠けたるコンタクト
強く吹く草笛明日は兄の帰京
バレッタは大きめが好き麦の秋
鍛造の実習終えて梅雨寒し
旧友の香がどこからか夏木蔭
SLの煙夏木のなかを来る
旋盤にたまる切り屑夏の夕
夏の宵横断歩道の白を踏む
乾ききった空蟬コピー機のうめき
残暑ありトイレの古き世界地図
アルバムの母は金髪盆の月
秋空へ還る風船のヘリウム
ビスマスの結晶脆し雪あかり
小春日やハニーポットの澱しずか
父は嫌い冬三日月の光りおり
ビーカーのかすれた目盛り三冬尽く
自転車スタンドけるや二月尽
握りしめる長旅のきつぷ弥生尽
ローファアのかかとの硬し四月尽
七月尽ガム風船の爆ぜる音
やり投げの順番待つや九月尽
ピアノには朝の冷たさ卒業日

15 日本沈没

初晴の雀荘駐車場に砂利
春光のベンチが朽ちてゐて静か
古本の匂ひを嗅ぎて椿かな
シャッターを上げる手のひらヒヤシンス
海渡る朧月夜の錆びてゐて
読点を打つごとくアネモネの消ゆ
イヤホンを片手に結ぶ日焼かな
プールから生まれ命の詰め合はせ
耳鳴りのやうな酷暑や二進数
風の濃き教壇に蚊を潰しをり
炎天やスクールバスは車検の日
露草やかさぶた剥がれおちてゆく
稲妻にぬつと滲んでゐるインク
秋ともし原子時計がうすくなる
うかうかと夜食に湯気が立つてをり
円周が孤独な秋の半ばかな
側溝のとろりと詰まる下弦の月
新聞に校長が載る九月尽く
秋のチョークの先端がずれてゐる
礼拝の朝や小春のヨーグルト
軽石の留まつてゐて日短し
防人の会話に舌は凍りゆく
日本沈没透き通るまで雪あそび
冬木立よりやはらかな喉仏
寒梅の花のほどけるまでの縁

16 星飛んで

どの指も絵の具のあをさ春の雨
つくづくし河原に傘を開きけり
ありがたう春の墓石に刻まるる
チューリップ合唱曲の甘きこと
わが呼吸分け与へたるしやぼん玉
ラムネ瓶覗く世界が泣いてゐる
影踏み の影を眺めて氷水
雨燕空を大きく切り取りぬ
扇風機独白は嘘まぜながら
利き腕に注射の痕や星涼し
七夕のねがひの中を抜けてくる
星飛んでここも水平線の果
星の夜無人の駅にあるチラシ
たそがれやつひに熟れきる木守柿
猪のむくろの瞳さんさんと
くづれゆく綾取りの塔咳ひとつ
しぐるるや手品にだまされて遊ぶ
冬の池眠れる鯉の背びれかな
雪だるまどのコンビニの跡地にも
葉牡丹の渦のやはらか失恋す
初詣終へて空腹なる小道
絵馬に筆居敷の痣のはや癒えて
櫛に置きし帽子の忘れもの
改札の出口は狭く初仕事
叶ふなら初凧のうへ歩きたし

17 手を繋ぐ

春寒やボタン信号またたきぬ
指の跡残る空き地の斑雪
折り鶴に山折り深し花吹雪
蝶々や舞の娘は足を引く
父親のツツパリ写真風光る
夏邸上方落語の聞こえくる
青嵐アキレス腱を伸ばしたり
五月雨や私を好きと言ふ男
雲海の木々に小人のゐるやうな
つり革に夏の大三角覗く
きりぎりす組体操の塔の立つ
マーカアの残る五線譜猫じゃらし
祖母の手は魚の匂ひ魂迎
履歴書のクリップに錆暮れの秋
新蕎麦を手繰つて祖母は泣いてをる
初雪に最初に気づく教師かな
水鳥や光集まる用水路
葱の肌くくぼと撫でて洗ふかな
橋下に羽を啣へる真鴨あり
三寒四温もう一度手を繋ぐ
初日入る寝台列車帰郷かな
歯を見せて選挙運動年来る
なまはげに畳のしみの踏まれけり
福引の音の通りを抜け行ける
初茜海といふもの包みをり

18 地を出る

控へめに畳みて飛行機の毛布
セーターの伸びやかソーキそば啜る
潮風の吸ひ付く頬や冬浅し
中古車は開けつ放しのまま時雨
帰り花シーサーの爪輝きぬ
申し訳程度のひかり冬雲雀
冬麗や丸く尖りて珊瑚礁
甲板の手摺を小夏日の潮か
持ち上げて海鼠に足のやうなもの
銃痕は石となり柵の花
オレンジに灯り寒夜の名護の海
凧に晒されてゐてタコライス
室咲や色鉛筆の一包み
平和記念公園てふを冬の蝶
慰霊碑を離れて裸木の二三
冬の蚊や靴を削れる石畳
百合鷗星は波もて均さるる
ランタンを灯して着膨れの横顔
冬の虹車窓を船とすれ違ふ
十二月八日地を出る珍穴子
枯蔦や香炉は雨を留めをり
ガジュマルの皺ふかぶかと息白し
冬晴れや右へ左へ軍用機
シートベルト腕に貼り付き冬霞
琉球の空を靡ける蒲団かな

19 わがままに

革ジャンの女白息途切れつつ
死者数3交番に霜降りる夜
ぼろぼろときりんのくその氷りたる
幼年の写真の裏の二月かな
お兄さんといふひびきや春愁
呉服屋のシャッターに雨春休み
寝転びて空の近さよ鼓草
早退や躑躅が海のやうに沸く
毛の長き猫たかなをつつきをり
年寄りの先んじて行く田植えかな
薫風にポメラニアンぞ鴉追ふ
下駄箱や眼鏡に流れ落つる汗
英単語クーラーのまた動きだす
沖を見てわがままになる海月かな
だくだくと西瓜の皿を濡らしたり
自転車の錆煩くて秋早
棕鳥の足浮くときの黄なりけり
青蜜柑先生の腕剛毛である
地鎮祭終へて秋刀魚の香りかな
山茶花や会つたからつて喋らない
ぎりぎりが好きで真鴨が杭の上
室外機見てゐて風邪の心地かな
ぽつねんとマスクを息で膨らませ
御降りやカレー屋の裏匂ひ立つ
道すがら初景色あり猪苗代

20 風巻

心拍の波形眺むる聖夜かな
みそ汁の出汁変へてみむクリスマス
早朝の優先席や冬至梅
天狼は僕等をひよいと越えていく
室外機並ぶ小道や冬の風
風花やフルート抱え帰りたり
冬木影棺の中の手を握る
凍星やマイクrofオンのきんと鳴る
冬空や記者の囲みの移動せり
虎落笛イヤホンをまたつけ直す
寒厨に製氷音のつつましく
はじまりの朝日を綴じた氷柱かな
冴ゆる夜病院からの電話かな
電光が粒で現るスキー場
ワイパーに銀杏落葉をはさみたり
冬うらら屋根より落つる雫かな
ペーチカや首輪をとった猫のひげ
まっすぐに五線譜引きて冬の朝
星繋ぎ帰りの道を探したり
凍鶴や寝たきりの子の足を揉む
冬風やテールランプの点滅す
砂時計かの如く落つ六花かな
火に油夜咄に酒昇る月
サイフォンに広がる泡や年の果
革靴で蜜柑摘みたる日暮れかな

21 生まるる

葛の花ひとひに雲はいれかはり
スモーキーマウンテン大陸めく残暑
里芋や祖母の手握り直す祖父
鵺日和ローマ数字の時計盤
臍臓は雲に似てゐて秋の夜
爽やかやイヤホンを巻く手のしづか
かがやきの象牙のごとき千歳飴
石炭のできそこなひといふ黒さ
オリオンの果の寂しき星なりけり
水晶を覆ふびらうど雪催
みづあめをちひさく掬ひ寒の月
寒林を超えクラークの指の先
あやとりに生まるる星よ二月尽
しやぼんだま消えて遠くはない言葉
麗かやパイプにモルモットの渋滞
飛花落花美術館てふ美術品
なんとなくわかるインコの歌や春
髪色を変へても杏散つてゆく
土塊のかたちに死んでゆく牡丹
くらがりに猫ら落ちあふ蛇苳
単線の町に浮輪を膨らます
親友に真似らるる目や山桜桃
はたはたと夏にかくれてゐるカーテン
海の日の空をたゆたふ飛行船
秋近し緑の多き教習所

22 おとしもの

教室に落としたことば春來たる
残雪や涙の濃度高くして
春曉の空はアルカリ性の空
長閑さにiの世界は開けぬまま
春眠やダリの時計のやはらかし
懐かしき春日英訳なきと知る
靴下にぽつかりと穴南風吹く
ため息をすれば夕立雲の増す
五月闇コンパスの跡だけ残る
向日葵や重力を振り切るやうに
花といふ花の焦がるる花火かな
川底に星の降りたるごとく夏
星月夜に何か落としたはずだつた
終戦日蛇口からぼたとひとつぶ
鉄棒の錆や星月夜にひとり
理科室の匂ひ纏ひて雨の月
泣き方を忘れ花野の遙かなる
石榴より秘密いくつか零れけり
後の月劣等の湯船に沈む
そつけなき電話の声や月冴ゆる
偏頭痛ばかりと凍星を割る
光秀に見惚れ信長の目の冴ゆ
ぱりぱりと新海苔ばあちやんの人生
風花も絶版本を撫でにけり
リスニング音声響み春近し

23 またいつか

まつさらのプリーツ率い春一番
不在票狭まるポスト浮かれ猫
ガムを噛み続け噛み続け朧月
春塵や原稿用紙散らばつて
失恋や隣家に香るラベンダー
「またいつか」の「いつか」の軽き春の月
背負う子の固き拳や風光る
ドク博士のハンドルさばき陽炎や
香水やアイデンティティなきままに
玉葱の香や成績の返る朝
チューナーの針合わなくて夏の果て
夕蟬や飛行機雲の伸びゆくを
夕月や外野の果ての球拾い
工場の煙の高き秋の夢
切れ端の主張檸檬の苦きかな
黄落や待合室に龍之介
静謐に墨の香は濃し秋の宵
モルモットのねごとを吸って冬ぬくし
大縄の声高らかに冬の虹
葱刻む君を思ふや赤信号
喧嘩してひとときは明かし冬の月
訳を消すチョークの粉や雪しまき
赤本の付箋あざやか霜柱
天狼やセーラー服にトラジャの香
ランドセルの列追い抜けば春の雪

24 椅子

陽光や新入生の座る音
春昼や「椅子からどいて」犬に言う
蚤の市の折り畳みチェア春一日
古本の積まれる椅子や花曇
朧月椅子ゆらゆらと反省文
夏めくや新築に椅子二つ置く
椅子の背の木目の深し五月晴
紫陽花や回転椅子に油さす
半夏生優先席に杖並ぶ
扇風機教師の椅子はキャスター付き
銀色のベンチ病葉照りつける
涼み台人類は二足歩行に
長椅子の釘緩みたる敗戦忌
保護者席から見る騎馬戦や涼新た
紅葉狩ベンチに雫残りけり
揺り椅子や金柑の生る小さき庭
ベビィチェアの私の写真銀杏散る
肘掛けの大きなソファ初電話
食堂の椅子ささくれて寒のうち
流感の空席四つ灯油匂う
春近し面接を待つパイプ椅子
コンビニのイートイン席日脚伸ぶ
レンタカーの椅子の固さや春浅し
椅子四つ運ぶ卒業式準備
卒業や椅子にシールの跡残る

25 生きてみる

身に入むや電池は重いほう選ぶ
教科書にバーコードある残暑かな
油絵の仕上げのサイン稲光
夕月夜誰かは乗つてゐる汽笛
冷やかを一段おきに置いてゆく
隣国のはうへ秋蝶流さるゝ
無花果を空気分け合ふやうに割る
冬鷗ひとりで座る四人席
東京に無人駅ある小春かな
湯冷めして首を短調が伝ふ
ストーブの奥にこころのありにけり
断層に海の名残や神渡し
銅鐸を覗けば冬の夜の匂ふ
六の花記憶は端つこが柔い
転調の一息前にある淑気
うつかりとして飯蛸がゆで上がる
年表に余白ありけり春疾風
思ひ出し笑ひのやうな桜かな
鎖骨にもボディークリーム朧月
十字架の釘拭きにけり春驟雨
パンジーが咲いてピアノは長調に
海兵のダンクシュートやソーダ水
梅雨晴れを誰かのために生きてみる
曇天を引きずつてゐる毛虫かな
無気力な雷光落ちて来たりけり

26 鯉呼吸

仏像の裏にも顔や冬ぬくし
まだ草の匂ひを纏ふ枯蠟螂
風呂吹の湯気の二つに割られけり
理不尽に布を被せて炬燵とす
早退の日は南天の実のゆたか
引き波は遠くへ行けず百合鷗
蝶々や海の向かうの震源地
軽トラは春の堤に見え隠れ
知恵の輪に閉ぢこめられて春の月
春愁のホットケーキの気泡かな
風信子呼び鈴の鳴る斜向かい
飛魚のとび出し波の崩れけり
味噌汁をひと回しするカーネーション
くらくらとゆるる風鈴朝来る
暗号を解けば夏蝶群がりぬ
風薫るかつて象牙を売る港
見下ろして掬ふ金魚の瞳かな
人間のやうに寝る犬夏の月
秋めくや土囊引き摺りひきずられ
鐘楼の微かに揺れて子規忌かな
君の知らぬわたくしのゐて星流る
虫籠や階は音昇る場所
どの星の産声ならむ蚯蚓鳴く
すれ違ふリフトは無入霧襖
稲刈りの父をバス停から眺む

27 朝、出会ふ。

熊穴に入る甘えたくなる季節
タンスから手編みセーター亡き祖母の
喉の奥まで張り付くような朝
冬送る行つてらっしやい母の笑み
缶コーヒー並ぶ路地裏春を待つ
気づかずに実を踏んづけて枯銀杏
マフラーをまとうばあちゃんまだ乙女
募金箱募る男女の白い息
着ぶくれて黙つて群れて東京人
寒の雨あなたに貸せる傘はなく
木造のバス停日向ぼこの猫
オーバーや脱ぎて差し出さん君に
山眠る足音どこへ逃げるのか
隣の隣の隣の枝へ冬の鳥
悴みてバスの回数券を切る
冬の空鼻歌青にとけてゆく
鴨の湖雲の重さを担ぐやう
衣擦れの音に始まる冬稽古
願わくも初雪溶けり朝練後
外周を走る姿も冬めきて
凧の吹きて会話の途切れるる
気だるさの電車に轆かれ霜の花
初雪の寒さを忘れ弾む胸
朝冴ゆや脳に数秒後のチャイム
チャイム鳴る首を傾げる小鴨かな

28 ポインセチア

夏の月ルンバ充電中である
校長の話は長し毛虫這ふ
カーネーション母は薬を手放さず
妊娠中絶出目金のよく泳ぐ
ストローに泡の整列ソーダ水
先生の寝顔鋭く夏の果
嘘つきの子の朝顔のつる長し
秋風や金箔貼つてあるソフト
野分来る大地に血管めく河川
鼻歌も名曲となる涼新た
ライオンの檻の深きや朝の露
タピオカの店ばかり増え神の旅
メレンゲの角倒れたる冬の朝
落ち葉踏む人類それなりに歴史
ポインセチア軍事衛星瞬いて
直角の溶けゆくバタクリスマス
散骨の海を見てゐる師走かな
数へ日や接骨院にインド人
恵方巻き食むやロケット打ち上がり
初詣小銭を温めて並ぶ
花躍る回遊船を揺らしけり
麗らかやキリンに逆さ睫あり
肉詰めの肉は半分春の昼
春水に嘶くディープリンパクト
水草や空いつせいに暮れてゆき

29 とろり

霞より路面電車のとろり出づ
下萌や鈴の鳴りたる三輪車
割れかたのそれぞれ違ふしやぼん玉
みみたぶの穴塞がりて春の雪
カーネーション指輪のきつくなつてをり
梅雨空や門扉開けたる音のして
夏蝶のみづに触れたるところまで
白靴の螺旋階段駆け下りて
公園の鉄棒くぐり月涼し
噴水に恋文の文字かすみをり
夏空や船の模型の透きとほる
イーゼルを浜に立てたる晩夏かな
消印は海辺の街やラ・フランス
花柄の杖は弾みて涼新た
靴紐を結びし背中秋の蝶
教科書をわざと忘れて秋桜
長き夜の積み木の城の崩れをり
爽やかや声の揃わぬ合唱団
たんたんと点字を打ちて秋の風
露草や髪梳く指のぎこちなく
擦り切れしトランクの革秋時雨
初冬のピアノの蓋の重さかな
一件の不在着信寒牡丹
銀色の鍵の刺繍のカーディガン
スケッチに青色多し冬麗